



―― 昨年鳥海山に登って体力が落ちているのを実感して以来、ほぼ毎日トレニングをしていく。体力に応じて山は遊んでくれるので、楽しく登りたければやるしかない。それから一年半、病気やけがはもとより不調を感じることもあまりないので効果はあったのだろうが、慣れたという以上に取り立てて目立った変化はない。バランス運動は毎日同じところでグラグラしているし、柔軟性についても実に変わりがたいものだと思つた。元々が硬い上に肩、腰、首が満足に回らない状態で始めたからでもあるが、一年半経つても相変わらず硬い。才能がないとはこういうことをいうのだ、と思う。人と同じことをやって異常に伸びるのがプロなのだそうだが、確かに上達するスピードや量が異常だから抜きん出るのであつて、それは少数の才能ある人間に限られる。とはいえ、才能がないことは止めることの理由にはならない。どれだけ時間がかかろうと、どれだけ歩みのがらうと続けていけば少なくとも現状維持にはなる。柔軟運動に関しては、体がそれに合わせて変化するまでに年単位の時間がかかると言う人もあるので、それを楽しみに長に続けようと思う。

選書の能力も、過信しないようにと自分に言い聞かせている。温泉旅館主の選書眼と配置の妙に感服して

からというものの、真似したくてたまらないのだが、こは沸き立つ妄想を押しえつけ静まるのを待たねばならない。ぼくが多少なりとも持つているのは、主の選書眼を感じ取る能力であつて、選書の能力とは異なるものだ。真似することに時間と金をかけるくらいなら、何度でも泊まりに行くことにしよう。そうすれば宿泊料の一部は館主の選書に使われ、次の宿泊客の喜びになる。その方がよっぽど金が生きる。

去年やらかした器選びの失敗も、この才能のあるなしの読み違えだった。これぞという一品に出合うドラマを夢想して勇躍窯元巡りに向かつたが、巡り始め早々に頭がぼんやりしてきて、二軒目には己の愚かしい勘違いに気づいたのだつた。たぐさんの器の中から選り分けるなんて才能は、ぼくにはなかつた。おかげでちよつと遠回りしたけれど、いつも行つてる器屋さんで求めるのがいちばんよいという結論を得た。

よい器に出合おうと思つたら、才能ある人が選んだ中から見つければよい。自分の扱う器に心底愛情を注いでいる店主の選んだ器は、やつぱりお気に入りになつていく。そういう人を見つけ方が器を見つめるよりずっと容易い。愛情深さを感じ取る能力というのは、誰もが生まれてからずっとトレニングを積んでいくと思ふのだ。

専業ババ奮闘記 (その2)130

木幡智恵美

迫りくるコロナ (5)

保育園の方は、実歩が火曜日から、宗矢は水曜日から登園再開となつた。月曜日は娘が休みを取るけど火曜日までは休めないというので、宗矢を一日預かることに。火曜日は娘の誕生日で、昨年から、夕ご飯を作り、それをプレゼントにしている。今年は何にしようかと考え、豚の角煮と茶碗蒸し、白和え、それと、もらつたばかりの筍の木の芽和え、煮物、酢の物を添えることにする。当日は宗矢の面倒をみないといけないので、前日にあらかじめ作っておいた。火曜日の朝、娘が宗矢を連れて来た。いつも一緒に保育園に行く実歩が車に乗つたまま、自分だけ降りることになるので泣きはしなかと心配していたが、大丈夫だった。

仏間で少し遊んでから庭へ出た。宗矢は草取りが大好きだ。一緒に草を抜いてくれ、助かつた。その後、ニヤンを探しに歩くがなかなか見つからず、空き地に生えた草に無数にたかるアブラムシを追つたりつぶしたり。結構な時間、外を歩きまわり、その間はほぼしゃべりつばなし。おしゃべりできるのが楽しくて仕方ないようだ。

暖かい仏間でジジと三人で昼食。宗矢は大好きなミートボールをつつき、野菜も煮物も残さず食べた。午後は犬を見に行き、帰りにおんぶをしてやると、家に着くまでに眠ってしまった。夕方娘が時間給をとつて、寛大と実歩を新型コロナウィルスのワクチン接種に連れて行き、帰つた頃によく目を覚ました。娘の車に誕生プレゼントのおかず一式を乗せる。ついに娘も大台に乗り、いいお母ちゃんになったものだと、走り出す車を見送つた。

ワクチン接種の後、翌日の夜になつて実歩が高熱を出したと連絡が入り、今度は実歩を預かることになる。夫が迎えに行き、連れ帰つてきた実歩は、見た目は元気だ。私の副反応の時のような倦怠感はないようで、トランプやウノをして普通に過ごした。昼食後、実歩の身体がやけに熱いなと思つて測ると三十九度を超えている。熱冷ましシートを替え、頓服を飲ませた。翌日来た際も熱はまだ三十八度台だが元気で、いつもと変わらず遊んだ。私は二十四時間でピタッと副反応は収まったが、実歩の熱は数日続いた。

30代フリーター 岸田文雄はアメリカで「国民一人一人が主体的に国を守るという意志の強さの大切さ」を語ったと伝えられている（首相官邸ホームページ、1月13日）。

年金生活者 日本国民がそうした「意志の強さ」を持ち合わせていないことへの危機感の表明と受け取ることができ。今のままではいくら防衛費を増やし、敵基地攻撃能力を備えても、張り子の虎になりかねない。そう考えて国民の尻を叩きたがっているように見える。

30代 岸田の言葉が国民に響くとは思えない。

年金 「日本周辺がヤバくなっているから、自衛隊がんばって」と声援を送る一方で、自らは戦いたくないというのが現在の大多数の国民の本音と推察される。前にも紹介したとおり、世界の社会学者らが実施した「世界価値観調査」によると、「もし戦争が起こったら国のために戦うか」との問いへの回答で日本は「はい」が13・2%

心感を与え、その戦意を削ぐこともする。無防備な赤ん坊に危害を加える者はまれだ。

戦後の日本は世界中に弱さをさらすことになってわが身を守る道を選んだ。その法的な表現が憲法9条だ。こんな選択をした国は歴史上ない。アメリカという巨人に完膚なきまでに打ちのめされ、弱みを隠しようのない状態にまで追い込まれた結果だ。

それによって軽武装・経済優先の路線を走ることができ、世界が驚く高度経済成長を達成した。それは弱みしかなかったところに新たな強みを加えたことを意味する。それでも憲法を変えずに弱みをさらし続けたのは、手にした強みをいつでも軍備に転化できるという自信と、それでも実行はしないという矜持を持つことができたからだ。

30代 その強みが今はぎ取られつつある。国民1人当たりのGDP（為替レートベース）は2000年に世界2位だったのが2021年は22位だ。年金 自信と矜持を削ぐには十分な落

と、調査対象79カ国中最底だ。一方、昨春の朝日新聞の世論調査では、自衛隊は憲法に「違反していない」が78%にのぼる。つまり、もし戦争になったら、自分は戦わないけれど、自衛隊が戦うのは支持するということだ。

30代 それ、日本国民をけなしているのか。

年金 美点として言っている。戦う意志の欠如、あるいは弱さは憲法9条の精神であり、安全保障という周辺国への「安心供与」となる。たしかにそれは軍備を張り子の虎にし、物理的な抑止力を低下させるが、代わりに目に見えない抑止力を高める。

岸田は今年初め突如として「異次元の少子化対策」を言い出した。若年層が減り続ければ、今でさえ定員割れしている自衛隊は、いくら国民の大多数が支持しても、いくら武器弾薬を買って込んでも、その使い手がなくなる。その危機感が岸田の「異次元」発言を誘う要因のひとつとなったと考えることができる。

差だ。それが弱みをさらすことへの恐れを誘い、専守防衛から逸脱する敵基地攻撃能力の保有や防衛費の大幅増額のかげ声となつてあらわれている。

30代 軍拡の流れは日本だけではない。

年金 第2次世界大戦のあと、世界の戦争の本流は「流血の戦争」から「無血の戦争」に移った。東西冷戦がその最初の大規模な事例となった。人類を何度も滅亡させることのできる大量の

30代 そこに結びつけるのは飛躍じゃないか。

年金 軍備の増強と人口対策が表裏一体をなしていることは戦時下の大日本帝国の国策「産めよ殖やせよ」が示しているとおろいだ。少子化の進行は自衛隊員の確保を困難にするだけでなく、生産年齢人口の減少を加速し、戦争遂行のための土台を崩していく。

「国民一人一人が主体的に国を守るという意志」といった言葉は安倍晋三からさえ聞いたことがない。世界に類例のない非戦の憲法がやはり彼を縛っていたと思える。彼は自らの意思を意志にかえることによって、それを岸田に実行させようとしている。

30代 弱みを見せると、それにつけ入る国があるという警戒感がいま世界を覆っているように見える。

年金 私たちが他人に弱みを見せたがらないのは、たぶん動物的な本能に根ざしている。見せればいつ襲いかかれるかわからないと恐れている。他方で人間は弱みをさらすことで相手に安

核兵器が「使えない兵器」になったからだ。軍備のおもな機能は「破壊」から「抑止」に移った。

「無血の戦争」は「破壊力」ではなく「抑止力」を競い合う。だから軍備が破壊されることはない。だが、軍費が少なくて済むわけではない。軍事技術の発展は軍備の絶えざる更新を迫るからだ。

「流血の戦争」なら軍備が破壊される。すると、各国の軍事力に著しい不均衡が生じる。その結果、日本では世界でただひとつの非戦・非武装の憲法が誕生するといいう「奇跡」のようなことが起きた。

「無血の戦争」ではそうした不均衡は生まれにくい。各国の軍事力は平準化に向かう。A国が軍備を拡張すればB国はそれに対抗して拡張する。西側諸国で加速する軍備増強は中国やロシアへの対抗を理由にしている。平準化に向かう流れのひとつであり、日本政府の突然の防衛費増額もその流れの中にある。

ニュース日記 862
中村 礼治

岸田軍拡